

日中両国の専門家が手を携えて共に努力する

中国瀋陽第十人民医院

院長 孫 穎



孫穎院長（筆者）から宮城県結核予防会佐藤専務理事へ記念品贈呈

瀋陽市防癆協會は日本の宮城県結核予防会と1991年に友好関係を結んで以来、毎年1回中国の瀋陽と2010年までは日本の仙台で、2012年からは結核予防会本部と交互に『結核予防及び胸部疾病日中友好交流会議』を開催している。この友好交流活動は25年の長きにわたって続いてきた。2016年は東京において『第25回結核予防及び胸部疾病日中友好交流会議』が開催されることになり、瀋陽市胸科医院の孫穎院長を団長に、瀋陽市胸科医院の盧振春副院長、瀋陽市胸科医院内視鏡センターの張慶主任、長春市伝染病院の鄭永利主任、呉春主任を団員とし、瀋陽市医学友好交流団を結成して会議に出席した。

10月18日、瀋陽から東京に向かい、成田国際空港から列車で東京に向かった。

10月19日、結核研究所にて午前10時、第25回結核予防及び胸部疾病日中友好交流会議が開会し、まず結核予防会工藤理事長の挨拶があり、その後日中友好交流団団長孫穎院長が挨拶し、続いて日中双方の記念品交換があり、簡潔ながら厳粛な開会式の後に双方の学術報告が始まった。会議の内容は以下の通り。

中国の講演：1、中国の薬剤耐性結核の現状。2、気管-気管支結核の気管支鏡治療に関するレビューと考察。日本の講演：1、デラマニドの肺結核に対する治療効果。2、肺結核の外科治療。昼食後、複十字病院の結核病棟を視察し、講演終了後、日中双方の専門家がLAMP法の結果報告と展望について意見交換会を行った。日中双方の指導者及び専門家が、いかに日中の共同医学研究を発展させるかについて自由に討議

し、非常に友好的で打ち解けた雰囲気であった。最後に、島尾名誉顧問が今回の会議の総括を行った。会議全体の手配は良く整っていて、友好的な雰囲気であり、内容も充実していた。

10月20日、都内の視察をした。1,300万人以上の人口を擁する国際大都市は、高層ビルが林立し、通りは整って清潔で、公共交通が発達し、何もかも秩序が整然としていた。午後は仙台へ移動し、市内の江陽グランドホテルで宮城県結核予防会主催の歓迎会があり、同会理事長挨拶の後、中国側交流団団長の孫穎院長が挨拶し、瀋陽市防癆協会及び胸科医院を代表して記念品を贈り、記念撮影を行った。

10月21日、魯迅、青葉城見学をし、続いて同会複十字健診センター読影室を視察し、友好的な雰囲気の下、充実した内容の交流と討論を行った。

5日間の友好交流活動はあっという間に過ぎ、10月22日結核予防会と通訳の人々が成田国際空港まで我々を送ってくれた。今回の第25回友好交流も円満に成功したことを確認し、2017年も瀋陽にて第26回友好交流活動を継続することを約束した。

今回の交流を通して、我々は日本が結核対策において成し遂げた業績を感じた。数十年前は日本も結核に脅かされた国家の一つであり、数代にわたる人々の努力を経て結核の流行は日本において効果的に抑制された。各種の新技術が臨床に応用され、有効なDOTS管理戦略が実施され、日本の結核流行の抑制に要となる作用をもたらした。日本の結核専門家の謹厳で実務的な仕事と友好的で心のこもったもてなしは、我々に深い印象を残した。

結核は全人類の呼吸道を脅かす伝染病である。この30年、中国は結核対策の方面でも世間が注目する成績を上げているが、情勢は依然として厳しく、我が国の政府は結核を国家重点対策伝染病の一つとしている。国際協力と交流を強化し、全世界で効果的に結核を抑制することが重要である。日本は先進的な技術開発基盤及び先進的な管理措置と経験を持っており、日中両国の専門家が手を携えて共に努力することにより、遠くない将来、結核を撲滅する日が来ると信じている。🐼